

これまでの俳句鑑賞の末尾に作句上のヒントを兼ねて「作句の薬味」を適宜挿入することにしました。

ご承知のように薬味は、料理本体の素材を構成するものではなく、素材と正面から太刀打ち出来るものではない。しかし、素材との絶妙な組合せのもとに使用されたときには、素材の本来の味を効果的に引き出す。本鮪の中とろの刺身と言っても、それだけで出されたときには、魚肉の生臭さに箸は進まないけれども、刺身皿の端に本山葵の刷り下ろしが添えられているときには、刺身の味わいはより深いものとなる。「薬味」とは別の言葉で言えば「触媒」である。

【俳句鑑賞】

父と子の揃ひのシャツや梅雨明るる

友子

梅雨の時期は雨に降りこめられ、気分的に外出も控え目となる。梅雨明は気持ちを開放させ、活動的にさせる。そのような時期の到来を直指して、作者の妻が父と子へお揃ひのシャツを準備している。この梅雨明を心待にする気持ちは普遍的に受け入れられるものであるから、この句に賛同者が多いのは理解できる。

【作句の薬味】 『主役を俳句の主題に引きつけるように工夫すること』

メリハリの効いた俳句に仕上げる方法の一つに、その俳句の主人公を浮かび上がらせ、俳句の主題により引きつけることが挙げられる。構成音数が限定されている俳句の約束事として、俳句の主語は作者本人である。勿論、作者が俳句中に特定の人物や事物を出しているときは、それが俳句の主人公となる。句会に出された俳句が、「読者にとって通り一遍の常識的事項を単に述べているに過ぎない」、あるいは、「読者が持ち合わせた普遍的な価値や情感を提示しているだけに過ぎない」ものと判断されたときには、その俳句は平凡なものとして多くの読者はパスしてしまう。

掲句で言えば、揃ひのシャツを着る主役は父と子である。梅雨明けを心待ちに揃ひのシャツを準備したというのが俳句の主題であるから、前記【作句の薬味】に従えば、「父と子の揃ひのシャツ」というフレーズを「父と子の揃へしシャツ」としてみるのである。父と子が相談して揃ひのシャツを自ら揃えたことにするのである。

【作句の薬味】 『事実は何想を得る出発点であるが、必要に応じてこれから飛躍することも許される』

事実としてはシャツを主体的に揃えたのは作者である妻（受動的な存在としての父と子）なのであるが、前記の提案句では、俳句の主題に主人公に引き付ける工夫として、父と子が自発的意思を持ってシャツを揃えた（能動的な存在として父と子）というフィクション（飛躍）を入れてみたのである。

【俳句鑑賞】

卯の花の未完の刺繍友の逝く

ヤエ子

敬愛していた友人が急逝したとの報に接した作者。今、作者の眼前には友人が始めたが未完成のままになっ

た刺繍がある。色鮮やかな刺繍の糸が繰り出され、刺繍の針が刺されていたままかも知れない。俳句の構文から判断すれば、刺繍の題材は「卯の花」であったのであろう。刺繍が未完に終わったという事実を提示することによって、刺繍以外にも多くの仕事をやり残したままその生を終えた友への哀惜の情愛が良く出ている。

【作句の薬味】 『季語は現実そこに生きて存在するものとして使用すること』

刺繍の図柄に選ばれた卯の花は、今そこに現実に花を開いている季語としての「卯の花」ではない。したがって、掲句は季語のないものとなる。このような非季語的な用法は、〈朝のひまモネの画集白日傘〉の「白日傘」も同じである。画集や文学作品、手芸作品、書画作品、写真などに現れたものは、その季語性が否定されるのである。

「卯の花」を季語として扱い、掲句を構成し直すのであれば、〈卯の花や友の未完の刺繍糸〉と提案することができる。

【作句の薬味】 『イメージ的に重複する言葉は一方に集約すること』

構成音数が少ない俳句では、イメージが重複する言葉の重ね使用は避けた方がよい。この意味では「未完」と「逝く」は至近のイメージを持つので、上記提案句では、「未完」に集約した。「未完」には、大病の故に刺繍を止めたという相対的停止と、死によって刺繍が続行されなかったという絶対的中止の両方が内包される。そのどちらかと思うかは、読者の鑑賞に任せればよい。

【俳句鑑賞】

山気籠め蛩袋のひとつづつ

貞勝

山気をひしひしと感じながら山道を辿っていたとき、ふと眼にした蛩袋にその山気が籠っていると捉えた作者の感性は卓抜である。また下五に「ひとつづつ」と置いたことも、山気が溢れている様子を活写している。これによって蛩袋が一層印象的な存在として浮き出してくる。

【俳句鑑賞】

繕はぬ歳時記親し送り梅雨

秀一

俳人として長年使い慣れた歳時記はその分身のように身近な存在である。装丁や綴じ糸がほつれている程に使い込み、手に馴染んでいる歳時記に親しみを感じる作者の気持ちには共感する。「送り梅雨」との配合も程良い。

【俳句鑑賞】

かるがろと家を持ち上ぐ梅雨出水

明美

今年の暴れ梅雨による各地の惨状が日々報じられている。安住の地と思い定めた自宅が、圧倒的な水流によって浮き上がり押し流されるのをただ見ている他はない被災者のことを思うと、いたたまれない気持ちになる。掲句の作者はこのことを情感深く表すのではなく、客観的にその状況を示すことによって表そうとしたものである。

【作句の薬味】 『季語の内容を単に説明するだけの記述が避けるべきであること』

季語の内容を統一的に理解する手段として便利なものとして既に歳時記が種々編まれている。たとえ歳時記という便利な書物が存在していなくても、俳人として最低限心得ておくべき事項の内容説明に数少ない構成音数を浪費することは避けるべきである。俳句の主題を十分提示しないうちに全構成音数を使い切ることになり、俳句を貧弱なものとするからである。

掲句の上五、中七は季語「梅雨出水」の内容説明に近いものであるが、感情移入をしないで、淡々と家が流される様子を示したものと評価されたのであろうか。

【俳句鑑賞】

短夜や転々として明けを待つ

溪水

この短夜が「熱帯夜」となっていれば、賛同者は少なかったであろう。熱帯夜であれば、寝付かれなくて転々とすることは普通の有様であるからである。作者はいろいろなことを思い浮かべ、それにここを向けて寝付られない時間を過ごし、夜明けを待っているのである。少し季語の説明に近い句ではあるが。

【俳句鑑賞】

和太鼓が呼び込む夏のセールかな

明美

八月ともなれば盆踊の季節であり、その練習や本番で太鼓や笛の音があちこちから聞こえてくる。でも掲句は盆踊ではなく、商店街やデパートの夏セール（期末セール）のことを詠んでいる。太鼓の音に呼び込まれる買い物客のこころも躍動しているかのように感じられる。

【俳句鑑賞】

外つ国の人の後ゆく盆踊り

ツル子

国際化は大都市部だけでなく、地方都市でも進んでいる。単に好奇心によるものか、あるいは、地域に積極的に溶け込もうとしているのか、盆踊りの輪に参加する外国人の姿がよくみられる。日本人の作者はその外国人の後ろについて踊りの輪を回っている。踊りの手振りを外国人に合わせているのかも知れない。

【俳句鑑賞】

熱帯夜かすかにありし皮膚呼吸

明美

哺乳類の皮膚には、皮脂腺や汗腺といった様々な外分泌腺が存在しており、皮膚や体毛の状態を保つとともに身体の恒常性維持などに利用されている。特にヒトの場合には哺乳類では珍しく、汗腺から分泌される汗が体温調節の機能をも担っている。これを皮膚呼吸ということがあるが、この意味での皮膚呼吸が全呼吸に占める割合（酸素摂取量の割合）は、温度条件などによって異なっているが、ヒトでは10%以下とされている。

通常の肺による呼吸だけでは間に合わず、取るに足りない皮膚呼吸にも頼らなければならない、とまで大袈裟に言うことによって、当地の熱帯夜のもの凄さを表している。

熱帯夜を詠むにあたって皮膚呼吸を持ち出した俳句には初めて出会った。俳句へ新しい言葉を積極的に取り込もうとする作者の姿勢には好感が持てる。

【作句の薬味】

『季語に対置するものとして具体性のある事物が最適であり、観念や概念を対置すると、俳句は独りよがりの弱いものとなり易いこと』

掲句で出てきた皮膚呼吸は、皮脂腺や汗腺といった外分泌腺で現実に行われている具体的事象であるから、観念や概念ではない。

【俳句鑑賞】

テーブルに夏鳩の立ちポテトやる 真三

鳩そのものは季語ではないから、「夏鳩」といってもその季語性は脆弱である。日盛のなか餌を探している鳩が、作者のテーブルに飛び乗った。それに対して、作者は追い払うことはせず、ポテトの切れを与えたのである。好ましい風景である。

【作句の薬味】 『元々季語ではない動物や植物などに春夏秋冬の一語を付けてもその季語性は弱いものであること』

掲句の夏鳩がこれに当たる。掲句は、少し手直しすれば、〈日盛やテーブルの鳩へポテトやる〉とすることもできる。

(文責： 代表 増田 守)